氏　　名	金子祐木（カネコ ユウキ）
学位の種類	博　士　（音　楽）
学位記番号	博　音　第 196 号
学位授与年月日	平成23年３月25日
学位論文等題目	〈作品〉角田剛士　創作「風」 初世杵屋忠次郎　長唄「菊慈童」 〈論文〉日本舞踊演出論－新しい「素踊り」としての「現形式」の提案と検証－
論文等審査委員	

（総合主査）	東京芸術大学	准教授	（音楽学部）	牧　真弓
（副査）	〃	教　授	（　〃　）	三浦正義
（　〃　）	〃	准教授	（　〃　）	小島直文
（　〃　）	〃	非常勤講師		露木雅弥
（　〃　）	〃	教　授	（音楽学部）	関根知孝
（　〃　）	〃	〃	（　〃　）	塚原康子
（　〃　）	〃	〃	（　〃　）	杉本和寛

（論文内容の要旨）

本論文は、日本舞踊を日本伝統芸能の一つとして確立させるための第一の試みとして執筆した。日本舞踊とはどのような独自の表現を持つ芸能であるのかを様々な観点から分析し、それによって見出した日本舞踊独自の表現法を活かした舞台演出を「現形式」として提案し、実践研究として研究リサイタルにおいて検証した。さらに提案した「現形式」をどのように活かし、活動を広げ、日本舞踊を社会に浸透させて行くかについて考察を行った。

第１章では、「素踊り」そのものについて分析を目的とし、本来の「素踊り」の意味と、現在「素踊り」と呼ばれている舞台形式の現状について述べ、その解釈の変革を分析した。先行研究も含めて、両者を分析し、本来の「素踊り」の意味を再考し、現状の把握をした上で、日本舞踊の土台を明確に捉えた。

まず第１節では、現代において「素踊り」と呼ばれている舞台形式と、本来の「素踊り」とはどういうものかについて考察した。第２節では、現代における「素踊り」形式について、歌舞伎の「型」を参考に、日本舞踊家が「素踊り」形式を用いる目的について分析、整理を行った。第３節では書籍を参考に、作品の設計図として「素踊り」を定義し、舞台で鑑賞するための日本舞踊家独自の演出によって創られた作品に対して「現形式（うつしけいしき）」という名称を提案し、伝統芸能としての日本舞踊の基盤形成を試みた。

第２章では、日本舞踊独自の表現法を形作る事を目的として、第１章で整理した設計図としての「素踊り」を基に日本舞踊独自の舞台表現として「現形式」の構想案を述べた。第１節では、身体表現を主とした表現法を活かした舞台を創造するために、踊り手に関する要素に的を絞り、それらの要素をどのように発展させるかを模索し、さらにそれを基にして日本舞踊における表現の特徴について考察を行った。第２節では、舞台上の表現者の一つである演奏の表現力の効果、その必要性について述べた。第３節では、踊り手と演奏者以外の要素、すなわち劇場や舞台環境、会のコンセプトや客層をも考慮した舞台の創造を行う事によって、日本舞踊独自の表現として提示する「現形式」の存在意義を検証した。第４節では、第１節～第３節で考察した、筆者の提示する日本舞踊独自の表現「現形式」の構想をまとめている。第２章の考察を行った結果、日本舞踊独自の表現や主張、強化すべき技術や要素を捉えた日本

舞踊の独自性を持つ舞台を創る事は、可能であることが考えられた。

第３章では、第二章で考察した日本舞踊独自の表現法として提示した演出を用いて行った、３年間の研究リサイタルでの実技研究の内容詳細と、実例研究によって得られた事柄について、年次毎に整理した。現在において「素踊り」と称される様々な形式を用いて、与えられた条件、習得した手法を用いて、表現の幅をどこまで広げることが出来るか、どのような「独自の表現」をするかについて考察した。博士研究リサイタルを通して日本舞踊の形式の幅、表現の幅の広さを知るとともに、内面的感情の表現を観客に伝えることの重要性の理解が、１回の研究リサイタルを終える度に深まっていった。第３章で行った企画構想、実践研究は、「日本舞踊独自の表現」の特徴と成り得るものであると考えられる。

第４章ではこれまで述べてきた考察と実技研究を踏まえ、独自の特徴を持つ日本舞踊の発展の可能性と今後の課題について述べた。第１節は、本論文全体のまとめを行い、それを踏まえた上で、現代において発展を試みる日本舞踊の確立と発展方法について模索した。現代という時代の風潮を冷静に見つめ、社会から何を必要とされているか、それに対して伝統芸能を職とする我々はどのように対応すべきかについて考察した。第２節は、第２章での筆者が提示した「現形式」における各要素の分析と、第３章での実践研究を踏まえた上で、「現形式」における全体の構成を述べると同時に、「現形式」という表現形態が持つ可能性、日本舞踊を確立させるための課題について考察した。第３節は、今後の日本舞踊独自の表現の拡大について、教育面での貢献などの様々な場面に対して、表現の幅の広さを活かし、日本舞踊独自の新しい舞台によって貢献する事を提案し、現代の日本舞踊活動の方向性について考察した。

本論文において日本舞踊独自の表現法・演出法を見出す事により、他の芸能とは異なる発想を持つ舞台を提供できると考えられる。そのような舞台を様々な場所で提供する事によって、伝統芸能に関心のない現代の人々に対して伝統芸能という世界の入口を広げ、日本人が日本の文化に興味を持つという社会的風潮を広められる大きな可能性を持つ。そしてそれが日本文化保持に繋がり、またその活動方法を考案し、活動の場を広げることによって、日本舞踊は将来、日本伝統芸能として確立する可能性を持っていると結論付けた。

（総合審査結果の要旨）

（実　　技）

創作「風」古典「菊慈童」の発表はいずれも、論文を踏まえた安定した舞台でした。申請者の身体表現は、充分な練習と訓練によるものであり、鉄を真綿で包んだごとく芯は強く、体使いは真綿を思わせるしなやかで張りのある心地よい表現となりました。三年間を通してリサイタルを能舞台を使って開催出来たことが、能舞台での演出を習得することとなり、能舞台を余すところなく使いこなした作品となっている。但し今後作品によっては能舞台に日本舞踊をのせることに無理があることを申請者は心にとめる必要がある。

申請者の舞台は、踊りに欠かすことの出来ない呼吸方、間合い、気を意識したものとなり、本人自身の持ち味を充分に発揮した舞台となった。総評として学位に相応しい若々しく品格のある舞台と云える。

（論　　文）

日本舞踊演出論－新しい「素踊り」としての「現形式」の提案と検証。

歌舞伎舞踊から発生した日本舞踊を、日本伝統芸能の一つとして位置付けるために、日本舞踊とはどの様な独自の表現を持つ芸能なのか…を様々な原点から分析し、日本舞踊独自の表現法を活かした演出を「現形式」と提案し、活動を通して日本舞踊を社会に広めたいとする論文である。

現在、日本舞踊に於いて「素踊り」に関する資料は殆ど無く、申請者はここに新たな「現形式」を提案し「素踊り」を考察した。ただし審査員からは「現形式」の名称については様々なご指摘もあり、申

請者は尚一考を必要と思考致する。

申請者自身は三年の間のリサイタルを通して、日本舞踊独自の身体表現を試み、内面的表現を重要視した「素踊り」の研究を重ねてきた。「素踊り」は古典舞踊を充分に心得た上に成り立つ、奥が深く一朝一夕には結果がでるものではないが、素踊りを目指す若手舞踊家が多くなる時代を迎え、伝統芸能確立の第一歩として積極的で意欲的な論文と見ることが出来る。

ここに申請者による博士リサイタルの経験とその他の舞台経験を元に書かれた論文と実技は、ともに博士課程に相当すると判断され全審査員により合格とした。